

渋沢平九郎と渋沢栄一

東京都羽村市 山口正義

一、はじめに

権田直助の盟友・落合直亮に「飯能騒擾日記」というのがある。『埼玉叢書 第五』に所収されていて、解題に「明治元年五月、東京上野の彰義隊の戦争後、振武軍の一部が飯能町能仁寺、智観寺に立籠ったが、その時の状況または見聞した月記を国学者落合直亮が物したもので、敵身方入り乱れて会って話して居る有様が見られる」とある。

直亮はこの一ヶ月前、相楽惣三斬首に激怒し、元凶は岩倉具視にありとして岩倉暗殺計画を立てたが、結局挫折していた。その後京から帰郷し、さらに留守中の毛呂本郷の権田直助宅に寄寓し、直助の居室でこの日記を書いた（桜沢一昭『草の根の維新』。「飯能騒擾」とは勿論、慶応四年五月二十二、二十三日の飯能戦争の騒ぎのことである。『毛呂山町史』は当時の毛呂郷の状況をこの書から引用して「振武軍の飯能屯集と官軍の討伐とにより、本町も官軍側の部隊や振武軍のもの、さらに徳川家の旧臣で去就の定まらぬもの等の往来も激しく騒然たる状況であった。また敗れた振武軍の一部は高麗から宿谷・権現堂・大谷木へ入り込み逃走したものもあった」と記している。

この「飯能騒擾日記」の全文を読むと、倒幕運動に命を懸けていた直亮だが記述は全体的に客観的で、幕府軍を賊徒・流賊と呼びながらも不運を哀れみ、官軍の暴走を忌み嫌っているか

のようだ。この中に渋沢平九郎（一八四七〜六八）に関する次のような記述がある。

（官軍の探索は）途中冠り峠（顔振峠）にて飯能落人秩父郡中に逃げ去るとの注進に依り先手は峠を登る。時に六七十人間道を逃げ去ると通路を言ひながら追ひかけ去りし時、一人の男子木綿単物を着し短剣を帯び足早く通りしも先手は之を咎めさりしにや爰まで来りしに、中軍の官兵五人のものは怪しみ何方まで通るといふに此時左の手を地に突き右の手は胸に付け言語も凝滞分らざるを、官兵の打捨てよといふ合図を聞き拔手も見せず前に立ちし官兵を拔上に切放ち、返す刀に右に控へし官兵の右の臂を切落し左に拂ひ官兵の面部を切下け残兵二人蜘蛛の如く逃散りしに、後陣の官兵此の騒ぎを聞きつけ鉄砲を打掛れば先陣も取って返へし挟み打ちにせしかば、賊士も是迄と覚悟を極め三四丁行去りあたりの巖に腰をかけ高聲に相呼ばり莞爾と笑ひて腹十文字に掻き切りしに、官兵一人も近寄るものなかりけり。漸く鉄砲四五発打かけ首をば打ちたり。此首越生に持ち来り椽に鼻首せり。

吾野の「顔振峠」には子供の頃から何回も行っている。故事のように景色は抜群で、「平九郎茶屋」は今でも健在だ。最近に行く度に、二十二歳で非業の最期を遂げた平九郎を想わずにはいられない。

平九郎は渋沢栄一の見立養子（相続人）になったことにより人生が一変することになる。一方、栄一は後に「資本主義の父」といわれるような活躍をするが、平九郎のことは生涯脳裏から離れることはなかった。そのような人物と平九郎はどのような

関係だったのかに興味を覚えるので少しまとめてみた。

二、見立養子になる

洪沢平九郎は弘化四年（一八四七）十一月七日武蔵国下手計村（深谷市）に生まれた。兄に尾高惇忠（新五郎・藍香）と長七郎、姉に千代、従兄に洪沢成一郎（喜作、彰義隊頭取）と洪沢栄一がいる。千代は栄一の妻となり、平九郎は栄一の見立養子となり洪沢を名乗る。栄一は一橋慶喜の家臣となり慶喜が將軍となると幕臣となり、平九郎は幕臣の子として彰義隊・振武軍に参加した。諱は昌忠。平九郎の人となりは次の文が端的に表している。

幼ニシテ穎敏、父好ンテ浄瑠璃ヲ譜フ、昌忠傍聴慣レテ一谷嫩軍記、敦盛直実組討ノ段ヲ暗誦シ、稍其曲調ヲ成ス、人コレヲ賞ス、七八歳ヨリ読書習字ニ従事シ、十歳ノ頃ヨリ神道無念流ノ擊劍ヲ学ビ、其手法進退非凡、十五六歳ニシテ他ノ勇技者ト角シ相抵ス、又国歌ヲ水戸人青山並岑ニ学ヒ、其許ス処トナル、然レモ家世々農商ノ業ナルヲ以テ父兄ノ指導ヲ受ケ、両業ニ従事シテ敢テ怠ラズ、資性温厚ニシテ、沈勇果毅（洪沢平九郎昌忠伝）（藍香選）

さて、栄一は慶応三年（一八六七）一月、將軍の名代としてパリ万博へ出席する昭武（慶喜の弟）の随員として、フランスへ渡航することになる。平九郎を見立養子にしたことについて栄一は後年次のように述べている（『雨夜譚会談話筆記』）。

仏蘭西に行くに就ては、其頃の法律の規定によつて相続者を

定めなければならなかつた。所謂「嗣無ければ国除かる」で一家の相続者が無ければ其家が断絶する事になつて居つた（注：長女歌子は生れてゐた）。それでは氣の毒だからと云ふので海外旅行者の爲めに特に見立養子の方法が許されて居た。（略）私も仏蘭西に行くに就て別に良案がなかつたので、手紙で平九郎を見立養子にする事を言つてやつた。此時は事が少し急であつた爲め、京都で届出をしてから、所謂事後承諾を求める爲め郷里に手紙を出して、其の返事を待たずして出掛けた。

この見立養子に関連して栄一から千代夫人に宛てた慶応三年一月九日付の手紙が残っているので一部を紹介したい。

一筆申あけ示しまいらせ候、いまた余寒つよく候へとも、いよいよその御さわりものふおんくらしなされへくめてたくそんしまいらせ候、（略）さて此度は不存寄^{ぞんじよらず}フランス国え御使被 仰付、正月三日京都罷出、兵庫より御船ニ而今九日横浜迄罷越、明後十一日出立いたし候、（略）此度右御用被 仰付候ニ付、不存寄品々結構ニ被 仰付、難有次第御よろこひ被下度候、且又此度フランスえ罷越候ニ付而は、見当養子無之而は不相成候ニ付、平九郎事養子之つもり二いたし置候間、左よふ御承知可被成候、いづれ成一郎様江戸表え御かへり被成候ハ、そのもと并平九郎は江戸表え引取候積ニ、成一郎様えたのミ置候間、右ニ御承知可被成候 月日ははやきもの二候あいた、その中ニはかへり可申、それまでを御楽み御待被成度候、申こし度事は山々御座候へとも、とりいそぎあらあらふてとめまいらせ候、かしく

正月九日

篤太夫

お千代とのえ

これに対し千代から栄一宛に宛てた、「先頃ハ平九郎見当養子義仰付られ、難有御受申候、九月中江戸表へ罷越御切米戴き、御留守いたし御帰国を御待申居まいらせ候、付てハ私事も仰のとふり江戸にて御待申度候へ共、おもふよふ二ならぬ事候へ共、宜敷御察よふ被下、御さしつ頼上まいらせ候」(日付は慶応三年のみ)といった手紙もある。

三、平九郎から栄一への手紙

平九郎は慶応三年夏より江戸本銀町四丁目宅を定め(「渋沢平九郎昌忠伝」、江戸での生活が始まった。しかしその矢先の十月、大政奉還の一報が届き、平九郎はすぐさま下手計村の惇忠のもとへ行き、相談をもちかけている。続いて十二月に王政復古の大号令、翌慶応四年一月に鳥羽伏見の戦い、慶喜追討令と、幕末の動乱に平九郎は巻き込まれていった。因みにこの間に発生した薩摩藩邸焼き討事件について「平九郎昌忠伝」には「十二月廿五日浪士江戸薩州邸ニ僭居シ、市中ヲ乱暴シ酒井左衛門尉屯所ヲ砲撃シ、江戸城ニノ丸ヲ放火烧亡シ、遂ニ酒井氏大挙シテ其巢窟ヲ討敗スルニ方ツテハ、昌忠書ヲ義祖洪沢晩香(注：市郎右衛門)ニ寄セテ其概略ヲ述ベ」とある。

この間の状況について平九郎は栄一に二通の手紙を出している。当時の心境を窺い知ることができる。一通は慶応四年一月十日付のもので、栄一が横浜港を出港してから凡そ一年後のことである。また追記で、「栄一筆」で「慶応四年春仏国へ送り越せし平九郎手翰」とある。(ふりがなは筆者付与)

追書ニ而は恐入候得共、大兄御義猶又此度結構被仰付誠ニ恐祝奉存候、猶御身上御養育折角御大切ニ被遊度奉禱候
頓首

新曆之御慶兆万里御同風目出度御超歳被為成候と奉恐存候、先以巴里表 上様御始尊兄皆々様御健壮被為在奉恐祝候随而御国血洗島家族下輩ニ至迄一同不事加年仕候間此段御休神被下度候奉存候(「符」)、右年甫之御祝義申上度万里外以拙札呈送仕候、猶期永日之時候 恐々謹言

正月初十日

渋沢平九郎

九拝

青淵尊大兄

虎皮下

副書申上候 御国之形勢昨孟冬中より追々大変ニ相成宣而委細は御用状御尊見可被為在候御事と奉察候、猶正月三日京坂之間ニ而薩長土其外と大戦争有之 御味方御勝利ニも無之趣実ニ恐入候事而已有之、万里外御心配之程奉察候、乍去御同様斯之御国勢ニ有之こそ御国事ニ乍恐周旋も被致候事ニ候得は驚嘆仕候ニは無之、畢竟太平ニ候ハ、草間ニ相果候身分兼而期候御国勢ニ相成候奉恐入候 上様御事御帰朝ニは不被為成候哉、乍恐 徳川氏之大危急と奉存候は外国御遊学は御国大平而後可然様奉存候、当時姦物 皇地ニ縦横仕候得は向後如何御国勢相変候哉、実ニ臣子之身痛心之至ニ候、余は家大人御書後便御発ニ相成候間其節申上可候、猶家族一同不事ニ候得は別而申上候事も無之候

恐々頓首百拝

副書からが情勢を伝えるもので、「薩長土其外と大戦争(戊

辰戦争)有之 御味方御勝利ニも無之」「徳川氏之大危急と奉存候」と述べ、早急な徳川昭武の帰朝を要請している。そして「御国事ニ乍恐周旋も被致候」と国事周旋に尽力するも、「向後如何御国勢相変候哉、実ニ臣子之身痛心之至ニ候」と幕臣の子として嘆いている。もう一通は慶応四年三月八日付のもの。これにも追記で、「栄一筆」で「明治元月三月東京発仏国へ送越せし平九郎手翰」とある。内容は次の様なものである。

尚々左之手ニは大刀之鯉口を握相認申候
何も々々不申上候

去十二月廿一日、御発之御細書当二月廿八日着逐一奉拝読候公子御始貴兄御側衆中様御壮健被為在候条奉恐寿候、随而御国一同不事野生ニ至(迄)不事罷在候間此段御休神奉祈候、陳は御国表之大変定而御承知ニも可被在候得共、日増ニ大变危急相成、誠ニ此十日計之内ニ徳川氏滅亡可仕候、最早此書面御覽之頃は於御国は如何様之事ニ相成候哉、明日之事難計、唯々血涙而已ニ候、中々大略ニも難申尽、実闇世とは関八州之今日事哉と奉存候、旗下有志之面々は弥官軍迫来候時は以死御謝罪申上御聞入無之時は於東叡山 大君と御供ニ滅亡と決心仕候、実ニ朝夕ニ相迫候事故恐歎之至ニ候、乍併遠慮有之は唯々土薩長其他諸藩共大暴ニ而下向仕候とし左候得は必々八州人心大ニ相背可申候間、小弟杯之見込巴里御在之公子而已ニ候間、御帰朝被為在候迄は草間ニ潜伏忍命可致候、乍去早々御帰朝は大不束ニ候、一度は八州薩長之物と相成候共、必大ニ乱れ可申候、其機を御伺察被成断然御帰朝被為在度候、最早今日ニ至候而は尽力仕候処は、再復而已候、実此寸書御名残ニも相成候哉ニ候間、此後は公子御大切ニ御守

護奉祈候、万々一御身上ニ恐入候事共有之時、野生共忍命候共甲斐無候間呉々も祈候は此事ニ御座候 早々頓首

三月初八日
青淵大兄君

尊下

(*休神ニ心を休めること)

三月八日という彰義隊の浅草本願寺屯所に居た頃の手紙で、新政府軍が江戸に迫る緊迫した中で情勢を述べている。冒頭、「左之手ニは大刀之鯉口を握相認申候」とある。手紙を認めている間も万々に備え左手は大刀の鯉口(刀の鞘の口)を握りながら書いている(いつでも抜刀できる姿勢)というのだ。

「十日計之内ニ徳川氏滅亡可仕候、最早此書面御覽之頃は於御国は如何様之事ニ相成候哉、明日之事難計」は慶喜の蟄居を受けてのことだろう。「官軍迫来候時は以死御謝罪申上御聞入無之時は於東叡山大君と御供ニ滅亡と決心仕候」と大変な覚悟述べる一方、「早々御帰朝は大不束ニ候」と配慮し、「一度は八州薩長之物と相成候共、必大ニ乱れ可申候、其機を御伺察被成断然御帰朝被為在度候」と不利な状況の中でも展望を述べている。

四、平九郎と彰義隊及び振武軍

慶応四年二月、慶喜が江戸城を出て上野寛永寺に蟄居すると、不満を抱いた有志たちは慶喜の復権に向けて集議を重ね彰義隊(義を彰かにする)が結成される。頭取は平九郎の従兄渋沢成一郎で平九郎も伍長に任命されている。また江戸城が開城して慶喜が水戸へ退去すると、平九郎は慶喜の様子を見に行ったりしている。

彰義隊では直ぐに成一郎と副頭取の天野八郎との間で軋轢が

生じ、平九郎宅が天野八郎派の隊士に取り囲まれる事件も発生した。閏四月、成一郎は彰義隊と袂を分かち振武軍（この命名は尾高惇忠によるという）を結成する。この時平九郎は自邸の障子に「楽人之楽者憂人之憂、喰人之食者死人之事 昌忠」と書き残して振武軍に加わった。平九郎は各地に赴き情報を集めており、五月十五日、平九郎から上野戦争勃発の報告を受けた成一郎は彰義隊の救援を画策するが、時すでに遅く彰義隊の残党とともに本営（箱根ヶ崎）に引き返している。

振武軍は飯能に入り翌日に本営を能仁寺に構えた。一方で新政府軍は彰義隊を討伐した勢いで飯能まで迫ってきていた。二十三日の明け方、新政府軍と振武軍の戦いが始まったが昼前には振武軍は壊滅した。この戦いで能仁寺ほか三ヶ寺、飯能市街地のほぼ半分が焼失した。成一郎や惇忠とはぐれた平九郎は、飯能と越生の境にある顔振峠にたどり着く。峠の茶屋の女主人は、すぐに平九郎が旧幕府軍の隊士であると見抜き、新政府軍の目の届かない秩父へ抜ける道を勧めた。平九郎は百姓に化けるため大刀を預けたが、何か考えがあつたことなのか越生方面へ下りていった。黒山に下った平九郎は、新政府方の広島藩神機隊監察の藤田高之一隊の斥候と遭遇する。敵方三人に小刀で応戦し、一人の腕を切り落とし、一人にも傷を負わせたが、右肩を斬られ、足には銃弾を受けた。平九郎の気魄に恐れをなした斥候隊の一人が仲間を呼んで戻ってくると、平九郎は川岸の岩に座して観念の自刃を遂げていたという。享年二十二。平九郎の首は刎ねられ、今市宿に寺の山門に晒された。一方、骸は黒山村の人々が全洞院に埋葬した。住職は位牌に「真空大道即了居士位 慶応四戊辰年五月二十三日 俗名不知 江戸の御方而候 於黒山村打死」と記した。「渋沢平九郎昌忠伝（藍香

選）」は次のように記す。

十八日又西北ニ向テ去リ、所沢ヲ経テ扇町谷ニ宿シ、十九日飯能ニ入り軍ヲ三所ニ分テ屯營ス（一ハ前田村、一ハ飯能能仁寺、一ハ中山村）能仁寺ヲ本営トス、昌忠ハ其職中隊組頭ナルヲ以テ本営ニ在リ、廿二日申刻、官軍正面ノ兵式千七百人、扇町谷ニ来着、明曉寄来ルノ報アルニ会シ、即夜三道ヘ夜討ノ兵ヲ出タシタルニ、広瀬方面ヘ向フタル一手ハ夜半ニ引上ケ返リシモ、扇町谷高萩二道ヘ向ヘシ二手ハ音信ナク故ニ廿三日払曉軍長渋沢成一郎自カラ百五拾人許ヲ率ヘ、昌忠之ニ属シ、鐘ヲ鳴シテ押出シ飯能ノ東ニ合戦ス、官軍二道ヨリ来リ夾ミ討ツ処トナリ、衆寡敵セズ本営ヘハ飛丸中リ、能仁寺本堂ノ屋ニ火発シ、防禦方尽キ全軍後山ヘ走リ、中途ニシテ昌忠来リ惇忠ニ云フ、深入リシテ敗レタリト遂ニ相失ス、既ニシテ山ヲ越テ北西ニ下ルニ、官軍二三百人既ニ前路ニ在リ、頻リニ砲撃ス、一軍四散山林ニ匿レ、或ハ無人跡ノ山嶺澗谷ヲ跋涉シ、軍復タ整ハザルニ帰セリ
其日昌忠一人トナリ、山村ノ一民家ニ入り、携ヘシ銃砲及ビ雄刀ヲ棄テ、前髪ヲ剃リ、月白鬢髪ノ庶人体トナリ、脇差一ノ（身長老尺七寸勝村徳勝作）ヲ帯シ、笠ヲ冠リ、蓆ヲ被、北ヲ望ンテ走リ、頬振嶺《カアブリ》ニ上リ茶屋ニ憩フ（飯能ヨリ三里許リ）二時許リニシテ嶺ヲ下ル順路ヲ問ヘシニ、屋ノ主人昌忠ノ装貌必ス飯能戦士ノ変服シテ来リシナラント察シ、問道ヲ指シ勸メシモ聴ズシテ北ニ向ツテ下リ、一里余ニシテ入間郡黒山村ニ至ル、時ニ又一手ノ官軍（芸藩神機隊兵斥候）六百人頬振嶺ヲ越テ秩父郡ニ入ント押シ来ル、其兵モ此地脱走兵ナキノ見込ニテ隊ヲナサズ、竹兜子ニ乗り前後

二人昌忠ト行違へ、次ニ斥候兵三人ニ逢フ、斥候兵昌忠ヲ誰何シ、昌忠ヲ中央シテ鼎立セリ、昌忠跪ヒテ近村ノ神職所用アツテ通行スト弁解セシモ、其状貌装儀山村田舎ノ者ニアラサルヲ以テ、敵ニ詰問セントス、昌忠突然ト一刀ヲ抜き、面前ニ向ヒシ一兵ノ右腕ヲ斬ツテ落シ、大声ヲ発シ叫ンテ曰ク、吾党六十人山上ニアリト又踏込テ一兵ノ背ヲ斬ルコト二刀、一兵後ヨリ昌忠ヲ抱ク、昌忠手ヲ振り戻シテ後兵ノ額ニ傷ツク、別ニ一兵来リテ抱カレタル昌忠ノ肩ヲ切ル、コレハ抱キタル味方後ニアルヲ以テ十分ニ討タザリシト云フ既ニシテ抱キタル兵モ傷ヲ負フタル為メ昌忠ヲ放ツ、同時ニ一兵短銃ヲ発シテ昌忠ヲ射ル、丸昌忠ノ股ニ中ル、昌忠南ニ向テ趨ル、斥候兵モ三人ハ傷キ斃レ、後兵続カサレバ昌忠ヲ追ズ、昌忠趨ル数十歩ニシテ、二創ヲ受ケ脱スベカラザルヲ悟リ、路傍ノ盤石ニ踞シ、自カラ腹ヲ屠リ、咽喉ヲ刺シテ死ス年二十二年弘化四年丁未十一月ヲ距ル二十年七ヶ月

(注1) 意味は「人の楽しみを樂しむ者は人の憂いを憂う、人の食を喰う者は人の事に死す(その人の為を命をかける)」。後半は『史記』にある韓信(前漢初め劉邦に仕えた武將)の言葉、前半は出典不明で平九郎の自作と考えられるという。他に次の歌もあつたという。
・ たらちねの親の恵みを今ぞ知る赤き心をうけしと思ふへば
(注2) 自刃の際次の辞世二首と詩を懷中に持っていたという。
・ 惜しまるる時散りてこそ世の中の人も人なれ花も花なれ
・ いたずらに身はくさじなたらちねの国のために生にしものを
・ 夏日夕陽 溪に臨んで氷りを得たり
なお、細川ガラシャの辞世は、
散りぬべき時知りてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ
というもので、平九郎はガラシャの運命に己の身を重ねたのだろうか。

五、栄一、平九郎の討死を知る

栄一が平九郎の不明を知ったのは、明治元年(慶応四年)十一月三日に帰国してから一ヶ月程経過してからだろう。且つ、平九郎の最後の様子と自決した場所が判明したのは明治六年であつた。後年の述懐だが、『雨夜譚』(渋沢栄一述、明治二〇年)に次のようにある。

(明治元年)十二月の六七日頃に、東京へ帰つて来て、段々と様子を見聞してみると、維新の騒動に付て、彼の友達は脱走したとか、此の親戚は死んだとか、種々に変化して居る、又故郷に居た時、共に大事を謀つた尾高長七郎はと聞てみると、其年の夏、幸に出獄はしたけれども、自分が日本へ到着する前に死去したとの事、其弟の平九郎は、自分が昨年仏蘭西に行くに就て、見立養子といふ名義で相続人に貰つて、養子屈をしてあつた、是は幕府の制度は外国行の者は万一外国に於て死去の事あらんも測られざれば見立養子を為すを要することとなりしが、此の平九郎も此の度の騒動に就て、其実兄の尾高惇忠や同姓の喜作などに随従して、諸々方々の戦争に出合ひ、遂に飯能宿近傍の黒山といふ所で討死をしたといふ話で、実に見るもの聞くもの、皆断腸の種ねならざるはなしといふ有様であつた、其処で我が一身はと反省してみると、海外万里の国々は巡回したといふものゝ、何一つ学び得たこともなく、空く目的を失つて帰国したまでの事であるし、又同姓の喜作は箱館に往つて、死生の程もはかられず、其他の親友も多くは死去、又は離散の姿で、実に有為轉變の世の中であると、嘆息の外はなかつた。

平九郎の遺骸は明治七年十二月に収められた。『青淵先生六十年史』（竜門社編、明治三十三年二月）に次のようにある。

平九郎ノ討死シタルハ明治元年五月二十三日午後四時頃ニシテ、時二年二十二、後明治六年八月青淵先生家人芝崎確次郎ニ命シ、越生村ニ到リ首級ヲ求メシメ、翌年十二月黒山村ニ到リ遺骸ヲ尋ネシメ、之ヲ収メテ帰り、上野寛永寺ニ於テ仏事ヲ営ミ、谷中ノ墓地ニ改葬ス

六、平九郎の刀戻る

渋沢平九郎の愛刀で確認されているのは三振であるという（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』等）。

- ・ 勝村徳勝作の大刀
- ・ 勝村徳勝作の小刀
- ・ 月山貞一作の大刀

勝村徳勝の大小は、飯能戦争時に平九郎が佩刀していたとされる。討死の際に佩刀していた小刀は、神機隊の川合鱗三の手で保存され、明治二十六年に栄一のもとへ戻った。茶屋の女主人に託した大刀も栄一のもとへ戻っている。勝村の刀は水戸の士に好んで使われ、より実戦向きといわれる。

月山貞一の大刀は昭和十五年に青森県の方から渋沢家に送られた。刀身の表に「撰州浪花住月山雲龍子貞一作之 慶応三卯年八月日」、裏には「應渋澤平九郎需」の銘文が刻まれている。一説には栄一がフランスに行く直前に注文しておいてくれたという。

討死の際の小刀が戻ったとき、栄一は七言絶句を作っている。難しい内容だが次に掲げる。

烏兔何時能雪冤 九原無復慰幽魂
遺刀今夜挑灯見 猶剩当年旧血痕

（一体いつになったら罪をすすいでやることができるのやら。これでは泉下の霊を慰めるすべがない。今夜、燭台をかかげて形見の刀をねんごろに眺めたが、まだ当時の血痕が残っているではないか）

七、栄一、平九郎の跡を弔う

栄一は二回、平九郎が自刃した越生の黒山の地を訪れている。ともに日記に記されている。一回目は飯能の能仁寺も最初に訪れている。二回目は越生での講演、毛呂での植樹も行っている。

【一回目】（渋沢栄一日記、明治三二年六月）

六月廿四日 曇

此日ハ曾テ尾高惇忠ト約シテ入間郡黒山村ニ於テ亡平九郎戦没ノ跡ヲ訪フ筈ナリシヲ以テ、朝来病モ稍愈タレハ、旅装ヲ理シ、午前八時飯田町ニ抵リ、甲武鉄道線ニ搭シテ九時国分寺ニ抵リテ休憩ス、十一時三十分同所ヨリ川越鉄道線ニ搭シ、十二時入間川駅ニ抵リテ午餐シ、夫ヨリ腕車ヲ僦フテ一里、黒須ニテ繁田武兵衛ノ宅ヲ訪フ、更ニ車ヲ馳テ二里、飯能町ニ抵リ能仁寺ニ詣ス、寺ハ維新ノ年五月振武軍ノ屯在スル所ナリ、当時ノ兵火ニ罹リテ堂宇・伽藍焼滅シ、僅ニ仮設ノ本堂アルノミ、午後三時過飯能町ニ抵リ、茶店ニ休憩シ再ヒ腕車ヲ雇フテ四里越生町ニ達ス、島野伊右衛門及浅見・新井其他ノ諸氏来リ迎フ午後七時過越生町島野伊右衛門ノ家ニ投宿ス、夜越生銀行員等来リテ商工業ノ事ヲ談シ、揮毫ヲ乞ハル、

依テ数紙ヲ試ム、午前一時過寝ニ就ク
六月廿五日 曇

午前七時越生ヲ発シ、腕車ヲ僦テ黒山ニ抵ル、雨後ノ道路、殊ニ山間陝隘ニシテ頗ル陰悪ナリ、午前九時黒山村平九郎戦没ノ地ニ達ス、寺院ニ於テ仏事ヲ営ム、村人来リ会スル者三・四十人許リナリ、且平九郎戦没当時ノ状況ヲ知ル者来リテ其詳細ヲ話説ス、頗ル明亮ニシテ且確實ト認ムルモノ多シ、僧侶ノ読経畢テ一同靈壇ニ向テ香ヲ炷ス、仏事畢テ、再ヒ腕車ニテ越生ニ抵リテ午飧シ、直ニ車ヲ馳テ午後三時前川越ニ抵リ、川越鉄道線ノ列車ニ搭シ、国分寺ニ抵リテ更ニ甲武鉄道線ニ移リ、午後六時過兜町ニ帰宅ス

このとき次のような短歌を残している（竜門雑誌 第一三四号 明治三年八月）。

ことし六月のはつかあまり、渋沢平九郎が戦没せし梅園村
の黒山てふ地を尋て
渋沢栄一

なき魂をとふ黒やまのはかの上に

夕はえあかく咲くあふひかな

咲もあへす夜半のあらしに花散て

かをとゝめたる梅そのゝさと

【二回目】（渋沢栄一日記 明治四五年四月）

四月十四日 晴 暖

午前六時前起床、直ニ朝飧ヲ食ス、此日ハ越生町ニ開催セル各銀行ノ集会ニ出席スル為メ、七時王子発ノ汽車ニテ九時川越ニ抵リ、夫ヨリ人車ニテ十二時越生町ニ抵ル、地方人士多

ク来リ迎フ、着後先ツ越生銀行ノ二階ニ小憩シ、午飧後、同地ノ小学校ニ於テ一場ノ演説ヲ為ス来会者堂ニ満ツ、畢テ黒山ニ抵ル、地方人多ク同行ス、黒山ニ抵リ、寺院ニ休息シ、平九郎ノ遺跡ヲ探リ、五時越生ニ帰ル、一旅亭ニ開催スル歓迎会ニ出席ス、来会者凡式百名斗リ頗ル盛会ナリ、席上一場ノ挨拶ヲ為ス、畢テ樋口某ノ家ニ一宿ス、夜地方人多ク来リ話ス、越生銀行頭取等終始附随シテ款待ニ尽力セリ

四月十五日 晴 暖

午前六時半起床、入浴シテ直ニ朝飧ヲ食ス、七時半越生ヲ発シ毛呂村ニ抵リ小学校ヲ一覽ス、後毛呂神社ヲ参拝シテ直ニ人車ニテ十一時川越ニ抵リ、喜多院ニ於テ古跡ヲ探リ更ニ一茶亭ニテ午飧シ、午後一時発ノ電車ニテ大宮ニ抵リ更ニ汽車ニテ三時王子ニ着ス、家ニ帰リテ暫時休憩シテ後、兜町事務所ニ抵リ、種々ノ雑務ヲ処理シ、且数多ノ来人ニ接シ、午後六時半新橋発ノ汽車ニ搭シテ大阪ニ赴ク事トス

八、まとめ（平九郎に対する栄一の想い）

冒頭に述べたように、栄一は生涯平九郎のことが脳裏から離れることはなかった。それは幾つもの漢詩や自刃の地を何度も訪れていること、それに何回もの供養祭、さらに「振武軍」上演の協力などにも見られる。ここでは幾つかの文を紹介したい。

【その1】（出典：雨夜譚会談話筆記（昭和二年二月―昭和五年七月））

今から考へると、振武軍のやり方は少々拙づかつたのではなからうか、自惚れるではないが、私だつたらもつと外にやり方もあつたらうと思ふ。平九郎にしても早まり過ぎはしなかつたか、軽卒に失したとの憾みはないでもない。今から考へ

ると残念千万である。平九郎の人と為りに就ては、風采、容貌共に秀でて誠に氣立てが善かった。然し磊落とか云つた点はなく、深い思慮の念を欠いて居った。撃剣は大変勝れて、私等と一処に稽古してゐた頃は十五、六才であつたが年若にしては余程強かつた。

【その2】

【遣刀書巻の序文】(出典…竜門雑誌 第三六一号 大正七年六月) 思ふに平九郎の戦死は当時平九郎の余が姓を冒せるの日尚ほ浅かりしも、苟も身幕臣の家に在る者は、義父に代はりて一死主家の難に殉ぜしものとすれば、其心事亦実に憫諒すべきものあり、因りて茲に事由を自記して序言とす

大正六年五月 青淵洪沢栄一識時年七十有八

【その3】長女歌子の観察から(出典…竜門雑誌 第四八一号 昭和三年一〇月 穂積歌子)

郷党及親戚故旧に厚き青淵先生 穂積歌子

洪沢平九郎殿は義弟である上に慶応三年の渡欧に際し、見立養子に定められた間柄であります。徳川幕府の瓦解に当り、一片の義侠心から終に討死するに立至つた運命を深く憐まれ、且一面には其節大人は洋行中であつた為、徳川幕府に対する情誼を充分尽せなかつたのを、代つて果した様に考へられて、一層同氏の薄命を気の毒に思はれるのであります。「平九郎は彰義隊に加はる為寓所を出た時、僅か二十二歳であつたが、寓居の障子に『楽人之樂者憂人之憂、食人之食者死人之事』といふ韓信の語を大書した悲壯な振舞から見ても、将来有為な人物であり、且眉目秀麗な好い青年で有つたのに」

と、これも最近追憶談をせられたことであります。

ここにあるように、栄一は平九郎が自分に代わつてその役目を果たしたように考えていたようである。

参考文献

- (1) 落合直亮「飯能騷擾日記」(『埼玉叢書 第五』、国書刊行会、昭和49年)
- (2) 桜沢一昭『草の根の維新』(埼玉新聞社、昭和57年)
- (3) 『雨夜譚会談話筆記』
- (4) 「洪沢平九郎昌忠伝」(藍香選)、「藍香は悼忠(新五郎)の号」
- (5) 「遣刀書巻の序文」(出典…第57巻、原文は竜門雑誌 第三六一号 大正七年六月)
- (6) 『越生の歴史Ⅲ(近代)』越生町
- (7) 『幕末武州の青年群像』(岩上進、さきたま出版、平成三年)
- (8) 『特別展飯能戦争 飯能炎上』(飯能市郷土館、二〇一一年)
- (9) 『新彰義隊戦史』(大藏八郎、勉誠出版、二〇二〇年)
- ※ (3) ～ (5) は『洪沢栄一伝記資料』(洪沢栄一伝記資料刊行会刊に載せられているものによつた)。

- (10) 『青淵』(洪沢栄一記念財団機関紙、837号48頁、平成30年) なお、『青淵』676、685、712、742、743、768、770、827、835号等には平九郎に関するより詳しい記事があります。

参考1 (飯能戦争・洪沢平九郎に関連する資料等)

- ・『あゆみ』13号(昭和62年)に「飯能戦争と振武軍隊長の死地脱出秘話」(小川喜内著)というのがある。具体的な内容で貴重な資料である。
- ・『飯能戦争秘話』(高麗博茂編、毛呂山町郷土史研究会作製複製刻版一九

九九年)も同様。

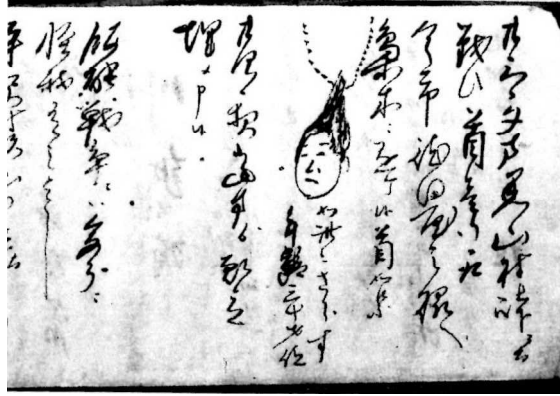
・『飯能戦争に散った青春像 郷土の志士 渋沢平九郎』(宮崎三代治 まつやま書房、一九八三年)

・「血痕」『我餓狼と化す』東郷隆、実業之日本社、二〇〇六年)

・『幕末維新埼玉人物列伝』(小高旭之、さきたま出版、二〇〇八年) 他

・飯能の能仁寺に「唱義死節」(義を唱え節に死す)という振武軍の碑がある。これには「昭和十二年五月二十三日尾高豊作撰並書」とある。

参考2 (平九郎の首級図)



廿三日夜方黒山村峠にて
戦ひ首壹ツ取る

今市徳田屋の脇へ

梶木ニ懸ケ候首級図の如し

此如にさらす

年齢三十才位

廿四日夜当方より願立て

埋め申し候

飯能戦争には多分に

怪我有之とて

平沢村杉山の直と申す者の

倅戦争にてあい働きその上

村方へ引取り候途中関門

にて召捕にあい成り首切られ候 (以下略)

(原資料は佐藤繁氏蔵)

(*は杉山銀之丞か)

渋沢平九郎の首級図 (『青淵』768号の奥田豊氏の論文より)

参考3 (栄一と平九郎の略年表)

和暦	西暦	渋沢栄一		渋沢平九郎	
		年齢	事項	年齢	事項
天保11	1840	1	2月13日武蔵国血洗島村で誕生		
弘化4	1847	8		1	11月7日武蔵国下手計村で誕生
安政5	1858	19	尾高千代と結婚		
元治1	1864	25	2月一橋家臣となる	18	6月手錠・宿預に処せられる(兄藍香が耕雲齋等との通謀を疑われたのに付随して)
慶応2	1866	27	12月7日フランス行き公命、平九郎を見立養子とする	20	12月栄一の養子となる
慶応3	1867	28	1月11日パリに向け出発		11月2日付で栄一宛書簡
慶応4 明治1	1868	29	11月3日帰国(横浜)	22	1月10日付で栄一宛書簡 2月彰義隊結成に加わる 3月8日付で栄一宛書簡 閏4月振武軍結成に加わる。 5月23日黒山にて自刃(21)
明治6	1873	34	8月平九郎の遺骸を收容して谷中墓地に改葬。その後黒山全洞院に墓建てられる		
明治26	1893	54	平九郎が自刃の時佩刀していた小刀が栄一のもとに戻る		
明治32	1899	60	6月栄一、尾高惇忠と共に飯能・能仁寺と黒山の自刃の地を訪れる		
明治44	1911	72	6月帝国劇場で「振武軍」上演		
明治45	1912	73	4月黒山の自刃の地を訪れる		
大正6	1917	78	12月平九郎追懷碑を谷中墓地に建てる(現在は深谷の旧渋沢邸にあり)		
昭和6	1931	92	11月11日死亡		